

<実践報告>

視点を定める
 —「物語再構成」の授業実践—

徳井厚子 信州大学教育学部言語教育講座

On the Shift of Frame of Reference
 —An Educational Practice of “Reconstruction of the Story”—

TOKUI Atsuko: Department of Language Education, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	物語再構成の実践とその効果を明らかにすること
キーワード	物語再構成 フレームの変換 共感
実践の内容	物語再構成の実践
実践者名	著者
対象者	信州大学教育学部1年生(100名)
実践期間	2006年5月
実践研究の方法と経過	当授業は1年生向けに開講されている専門基礎科目「多文化理解教育」の授業実践である。ベネットの述べる「自分自身のフレームの変換」を目的として、「物語再構成」(よく知られている物語を主人公とは異なる登場人物の立場に立って再構成する)を行なった。具体的には物語再構成を各自で行い、作品および感想を共有した。
実践から得られた知見・提言	受講生の選んだ作品は多岐にわたっていたが、対立的な登場人物を主人公にした作品、これまでほとんど登場することのなかったモノや人を主人公にした作品がみられ、単なる視点の変換だけではなく物語の構造そのものの変換や価値観そのものの変換がみられた作品もみられた。 物語再構成の実践および感想レポートの共有により、自分自身の持つフレームの変換、他者への共感を高め、相対主義的な見方を養うことができた。

1. はじめに一実践目的

近年、国内でも外国籍等児童など、多様なバックグラウンドを持つ生徒が教育の現場でも増えるようになった。こうした多様な背景を持つ教育の現場で教える教師を養成していく場合、多様な視点を持つ教員養成を行なっていくことが一つの大きな課題であるといえるだろう。

Bennett (1993) は、異文化間教育の中で、「共感」を持つことの大切さを主張している。Bennett (1993) は、同情とは、自文化中心主義にもとづくものであるが、エンパシーは、他者の見方を理解あるいは想像しようとするものであり、相対主義的な考えにもとづき、「自分自身のフレームの変換」(shift of frame of reference) を伴うものであるとしている。異なる他者と共生していくためには、Bennett (1993) の主張するように、他者にどう共感していくかが大切であろう。そしてそのためには「自分自身のフレームの変換」を意識的に行なっていくためのトレーニングが必要であると考えられる。

では、具体的には、どのような方法が考えられるだろうか。青木 (1996) は、異文化間教育の一手法として「物語再構成法」を挙げている。これは、物語を、主人公以外の登場人物の視点から再構成するという方法である。また、徳井 (2002) でも物語構成法を用いた実践方法が紹介されているが、青木 (1996) 同様、実践の紹介にとどまり、異文化間教育としての実践の効果を検証するまでには至っていない。筆者は、「物語再構成法」は、主人公以外の登場人物に視点を変換することによって、主人公以外の登場人物に「共感」し、Bennett (1993) の述べる「自分自身のフレームの変換」を意識的に行なっていくための有意義な方法ではないかと考えた。

そこで、筆者は、教育学部1年生を対象に行なっている専門入門科目「多文化理解教育」において、「物語再構成」の実践を通し、「自分自身のフレームの変換」を体験的に学ぶことを目的とした実践を試みた。本稿はこの実践報告を行ない、異文化間教育としての実践の意義について考察することを目的とする。

2. 実践：物語再構成における視点の変換

2.1 実践の方法と経過

今回実践を行なった授業は、信州大学教育学部1年生向けの専門入門科目「多文化理解教育」の授業である。受講者数は、100名であり、全員一年生である。授業は週に1回(90分)で、半期開講である。今回報告する実践は、2006年5月に行なったものである。

「物語再構成」をテーマに扱った実践の手順は、以下の通りである。

- 1) まず、受講者に以下の課題を与えた。
これまで読んだ「物語」を、主人公とは異なった登場人物(動物でもよい)の立場から再構成しなさい。A4一枚におさめること。
- 2) この課題を提出後、特によく再構成されていた8名分のレポートをプリントし、全員に配り、感想を書いてもらった。

3) その後、感想の中から8名分を選び、プリントして全員に配った。

2) や3) でレポートや感想をプリントした理由は、できるだけ多様な作品や感想を共有するためである。

2.2 実践結果

(1) 受講生の作成した「物語再構成」にみる視点の変換

今回受講生は多様な作品を選び、多様な視点から再構成を試みていた。

受講生の選んだ作品、及び新たな主人公は以下のようなものが見られた。以下に表で示す。

表1 「物語再構成」にみられる視点の変換

作品名	新たな主人公
白雪姫	毒りんご／小人の先生／継母／お妃／小人
人魚姫	人魚姫の姉／王子
浦島太郎	亀／乙姫
桃太郎	犬／きびだんご／おばあさん／鬼
かぐや姫	月の使者たち／くらもちの皇子
おおかみと7ひきのこやぎ	お母さんやぎ／おおかみ
あかずきん	野に咲く花／おばあさん／おおかみ
ももたろう	鬼／おばあさん
かさ地蔵	地蔵
したきりすずめ	おばあさん
ごんぎつね	兵十
西遊記	猪八戒
かちかち山	うさぎ
アルプスの少女	おじいさん
三匹のこぶた	おおかみ
シンデレラ	ねずみ／次女／魔女／王子
ヘンゼルとグレーテル	魔女
うさぎとかめ	かめ

この表を見ると、単に主人公を対立的な登場人物に変えたもの(「うさぎとかめ」のかめ、「ももたろう」の鬼、「白雪姫」の継母など)も見られた一方で、例えば「白雪姫」の毒りんご、「かぐや姫」の月の使者たちや、くらもちの皇子、「ももたろう」のきびだんごのように、もとの物語では、あまり登場していなかった人物や動物、モノをあえて主人公にし、焦点を当てることでこれまで明らかにされていなかった物語の「隠れた部分」に光を当て

ている作品も見られた。

前者のケースの場合は、主人公を（もとの物語では）対立的な視点の登場人物である「悪役」から「善人」に変換したケースが多かったが、もとの物語の「悪役」は実は心情的には優しい心の持ち主であり、その部分がもとの物語の作者によっては描かれていなかった、とする作品が多く見られた。再構成した物語では、新たな主人公の心情的な側面の変換が見られた。

後者のケースの場合は多くはなかったが、もとの物語ではほとんど登場することのなかった登場人物（動物やモノ）を新たな主人公にして物語を再構成することによって、もとの物語では描かれなかった新たな情景が創りだされ、これまで描かれなかった新たな主人公の心情が描き出されているというケースが見られた。

前者のケースの場合は、主人公の心情の変換にとどまり、物語における善悪という二項対立の「構造」そのものの変換は見られない。しかし、これに対して後者のケースの場合は、これまで注目されてこなかった登場人物（動物やモノ）にあえて視点を変換させることで、単なる物語の背景の一部として構成されていたメンバーがクローズアップされ、「物語のストーリー」と「物語の背景」そのものが逆転しているケースが見られた。また、もとの物語で扱っていた時間的、空間的幅を視点の変換によって新たに広げているケースも見られた。後者の場合は、物語再構成によって、「物語」の構造そのものを変換させていたということができるだろう。

では、後者の場合、具体的にどのような視点の変換が見られただろうか。作品例を見てみたい。

(2) 「物語再構成」にみる作品例

受講者の作品のうち、これまであまり注目されてこなかった登場人物（動物やモノ）に焦点を当てることで、再構成に成功した例を挙げてみよう。紙幅の都合上、要約して紹介する。

【作品例1】 かぐや姫—月の使者たちの視点から

昔、銀河系の中にある「月」という星にある一族が住んでいた。月の文明は非常に発展していて、地球で生命が誕生した時には銀河の支配者は月人だったという。そしてその月の世界にも王様がいた。ある日、初代王様の娘である月姫の誕生とともに、初代月文明創立を定めていたが、どういう手違いが起きたのか、姫は誕生したその日に当時の月の最新技術の「時空間移転装置」によって数百万年先の「地球」という星に移転されてしまった。王はすぐに姫を連れ戻すように命令したが、難しかった。王は姫を期日になったら連れ戻すことを遺言に残した。それから数十万、数百万という月日が流れ、その期日が近づいた。そこで月人たちは地球に派遣し、かぐや姫を迎えに行くことになる。

かぐや姫はすんなり要求を受け入れ、月に戻ってきた。しかし、もともと文明が発達しすぎていた月では、戦争が起きていて滅んでしまっていた。その形跡として今でもクレーターだらけだという。

【作品例2】 くらもちの皇子の視点からの竹取物語

くらもちの皇子は朝廷にまで噂が聞こえてやまないかぐや姫を一目見ようとかぐや姫の家の前にまでやってきた。ところが、かぐや姫はいつこうに出てこない。人がここまで集まってくると、今度は見るだけではなくかぐや姫と結婚したいと思うようになった。数日後かぐや姫があまりにも姿を見せないのので時間の無駄といって去っていく人が出始めた。しかし、日々減っていくライバルを見て更にかぐや姫への思いを熱くしていった。ある日翁がやってきて「姫は『私のほしがっているものを見せてくれた方に決めます』と申しております」と言った。自分への課題は蓬萊の玉の枝であった。あらゆる手を尽くしたが見つけることができなかった。そこで鍛冶の細工人に命じて蓬萊の玉の枝そっくりなものをつくらせた。制作は極めて秘密裏に行なわれた。ばれたらかぐや姫と結婚できないばかりか卑怯者として汚名を残すことになるからである。ついに蓬萊の玉の枝そっくりなものできた。いかにも苦勞したというふりをしてかぐや姫の家に向かった。しかし、かぐや姫の返歌は「まことかとききて見れば言のはを飾れる玉の枝にぞありける」であった。それをきき、ただ恥ずかしくて人前に出られず部下をかえして一人山にこもった。

【作品例3】 毒リンゴの視点からみた白雪姫

昔あるところに白雪姫と七人の小人たちが住んでいた。小人たちの家には立派なりんごの木があった。毎年白雪姫は収穫して小人たちにおいしいアップルパイをごちそうしていた。

ある一つのリンゴは「わたしも白雪姫に収穫してもらってみんなによるこんでもらえるおいしいアップルパイになりたいなあ」と思った。しかし、そのりんごは老婆に収穫され、家に入った瞬間その老婆は魔女へと変身したのだ。魔女は毒リンゴをつくり始めた。「白雪姫を殺すなんて嫌だ」という叫びも届かずそのりんごは毒りんごへとってしまった。毒リンゴにされたりんごはあんなにやさしかった白雪姫を殺してしまった罪の意識にかられていた。「今度またうまれかわったら誰も傷つけないみんなによるこんで食べてもらえるりんごになりたい」と思ったのだった。

【作品例4】 きびだんごの視点からみた桃太郎

桃太郎はおばあさんのつくるきびだんごが大好きだった。いつものようにおばあさんがきびだんごをつくっているとどこからともなく声がした。「おばあさん、やわらかくこねてくださいね。」「僕はきびから生まれたきび太郎です。おばあさんのやさしい気持ちから、桃太郎さんの役に立ちたくて生まれてきたのです。どうか僕を鬼退治のお供に桃太郎さんに持たせてください。」

桃太郎ときび太郎は仲良く旅をしていた。一人で旅を続ける桃太郎にとってきび太郎はよき話し相手でもあった。ところがきび太郎はある日ふと「自分は本当に桃太郎の役にたっているのだろうか」と思ったのであった。数日後、桃太郎ときび太郎は犬に会った。「桃太郎さん、お腰につけたきびだんご一つわたしにくださいな。」桃太郎は困ってしまった。「でもこれは…」そこできび太郎は決心したのであった。「桃太郎さん、どうぞ犬さんにあ

てください」「そんなことはできないよ、君は大切な仲間なんだ」「桃太郎さん、僕はあなたの役に立ちたくて生まれてきたのです。おばあさんともそう約束しました。僕を差し出すかわりにどうか犬さんを仲間にしてください。僕は犬さんの力となって必ず桃太郎さんのお役にたちましょう」桃太郎はその後キジや猿を仲間にし鬼退治することができたのだった。桃太郎は言った。「きび太郎、ありがとう。君のおかげだよ」「桃太郎さんのお役に立ててよかったです」どこからともなくきび太郎の声が聞こえたような気がしたのだった。

以上、再構成の例を4例紹介した。ここに紹介した作品はいずれも元の物語ではほとんどその存在すら知られなかったかあるいは印象の薄い登場人物やモノである。

作品1は、もとの物語では登場はしたがその存在についてはほとんど語られていなかった「月の使者」を主人公にしたものである。月の使者たちの住む月の世界を中心に、宇宙の観点から時間的にも極めて幅広く捉えた立場から物語が展開しており、時間的、空間的にも広がりのある物語空間が創出している。元の物語では「月の使者」は最後の部分だけ登場し、「かぐや姫」をさらってしまう立場として登場する。しかし、この再構成された物語では、月の使者を主人公にすることにより、かぐや姫が月の世界から地球にきたコンテクストを説明することから始まっている。元の物語にはほとんど語られなかった未知の部分が宇宙空間のレベルから新しく創造されている作品となっている。

作品2は、もとの作品は作品1と同じ題材であるが、「くらもちの皇子」を主人公にすることによって元の作品ではほとんど目立たない登場人物であったのが、再構成することによっていきいきと描かれている。元の物語では「かぐや姫対複数の求婚者」という構造であったが、新たな作品では、複数のうちの一人の求婚者に焦点を当てることによって「かぐや姫対くらもちの皇子」という構造になっている。また、元の物語ではほとんど描かれることのなかったくらもちの皇子の心情がリアルに描き出され、そのことによってリアルな作品として再構成されている。

作品3は、「毒リンゴにされたりんご」の視点から再構成されている。元の作品ではただのモノであったのが、新たな物語で主人公にすることで、いきいきとまるで生き物のように再現されている。物語そのものの筋は変わっていないが、元の物語では全く描かれていなかったりんごの立場から「アップルパイになりたかったが毒リンゴにされてしまった」心情を時間の経過と共にきめ細かく描写していくことで物語全体が更にリアルに展開している。

作品4も作品3と同様、モノに焦点を当てている。「きびだんご」の視点から再構成されているが、「人のために役に立つ生き方をする」というきびだんごの価値観が全面的に現れていて、元の作品とは異なった価値観への転換が見られる。作品そのものがきびだんごの視点から再構成されており、作品そのものが完結した形になっている。作品3とも共通するのは、モノでありながら、主人公にあえてすることによってそのモノ自体の心情をリアルに表現することでこれまで見えなかった作品のストーリーの流れがより緻密にかつリア

ルに表現されている点である。また、元の作品では一見スムーズに進行して描かれていた場面（りんごから毒りんごをつくる場面、きびだんごを犬に渡す場面）では、相当な葛藤があったというプロセスをリアルに描き出している点も挙げられる。視点を変換することによってよりリアルな「現実」を新たに創りだした作品とも言えるだろう。

(3) 「物語再構成」の感想から

では、受講者は、他の受講者の「物語再構成」についてどのような感想を持っているのだろうか。以下には受講者による作品への感想の一部を挙げる。

【作品1の感想より】

元のかぐや姫は、月の使者たちは重要な役割を担っているものの、あまり目立つ登場人物ではありません。もし自分が「かぐや姫」を題材に選んでいたら、おじいさんかおばあさんを選んでいたでしょう。そこを月の使者たちを主人公にし、更に彼らを銀河系の支配者、月人として位置づけ、時空間移転装置なるものを創りだしました。最後にクレーターの伝説まで書いてしまう想像力に圧倒されました。

【作品2の感想より】

作品全体からくらしの皇子がどれほどかぐや姫のことを思っているのかひしひしと伝わってきました。物語全体が淡々と書かれていることが、その効果を更に高めているように感じました。悪いこととは知りながらも、かぐや姫を自分のものにするためならどんな手段もいとわなないという主人公の姫を思う気持ちが伝わってきました。

【作品3の感想より】

人物を主人公にするのではなく、りんごを中心に物語を展開するという発想がいいなと思いました。原作に出てくるりんごは話を盛り上げるための単なる材料にすぎませんが、しかし、あえてそれに焦点をあて、話の軸になる存在にしたことで、とても新鮮な物語になったように思います。最後の一文も気に入りました。誰も傷つけないりんごになりたいという表現は、この作品に出てくるりんごの持つ優しさから生まれたものだと思います。

【作品4の感想より】

本当におもしろい視点から再構成していると思いました。あまり物語の中でもそれほど注目されることのないあきびだんごにこんなストーリーがあったんだなあと想像してしまいました。普通なら、桃太郎とさる、犬、キジの4つの登場人物が力を合わせて鬼を退治しますが、この作品を読むときびだんごも桃太郎の立派な助っ人の一人なのだと思確信しました。脇役の脇役であるきびだんごがこんなにも活躍するというストーリーにびっくりしました。

これらの感想を読むと、他者の再構成の作品を読み、感想を書くということ自体が、自己の視点の変換に結びついたのではないかと言うことができる。自分自身が課題を行ない、物語を再構成するだけでは気づかなかった多様な視点からの変換に、他者の作品を読むことによって気づいたことが、更なる視点の変換へと結びついたということができるだろう。

3. 実践の意義と考察

以上、本稿では「物語再構成」の実践を紹介した。本実践の意義としては、以下を挙げることができよう。

まず、物語を再構成していくプロセス自体が、Bennett (1993) の主張するいわゆる「自分自身のフレームの変換」につながるといえるだろう。本実践では、紹介したように、多様な視点の変換が見られた。対立する登場人物に焦点を当てた再構成作品も見られたが、あまり注目されることのなかったモノや人物に焦点をあて、物語の構造や価値観そのものを交換させる再構成作品も見られた。物語の再構成を通じて、書き手として自分自身のフレームを交換していくことで、相対的な見方を養うことができたのではないかと考える。更に、他者の作品を共有し、読むことで、自己と異なる視点からの再構成作品に触れることができ、そのこと自体が更に自分自身のフレームの変換を促すといえるだろう。

また、冒頭で異なる他者と共生するためには共感が重要であるということ述べたが、今回の実践においても、物語再構成のプロセスにおいて、新しい主人公への「共感」の体験に結びついたのではないかといえる。元の物語では「悪役」としていた登場人物でも、主人公にして物語を再構成する場合、新たな主人公に共感せずには展開させることができない。このように再構成そのもののプロセスが共感していくプロセスであるといえることができる。また、共有して作品を読む段階においても、新たな主人公への共感が必要になってくる。

以上、自分自身のフレームの変換および共感という観点からの教育としての物語再構成の実践の意義について述べた。本実践は、100名という大人数のため、すべての作品及び感想を共有することができなかったことが、実践の限界として挙げられるだろう。また、一つの作品に絞り、多様な視点から再構成を行なっていくという方法も課題として挙げられるだろう。本実践の手法については更に今後検討を続けていきたいと思う。

文献

Milton J. Bennett, 1993, *Towards Ethnorelativism : A Developmental Model of Intercultural Sensitivity, Education for the Intercultural Experience*, Intercultural Press, INC.

青木順子, 1996, 異文化コミュニケーションと教育, 溪水社

徳井厚子, 2002, 多文化共生のコミュニケーション, アルク

(2006年6月30日 受付)